

# 一栄谷 眞見の私見



からがませ(頭張れの意、くまもと)食べて呑んで勝手に熊本を応援する会として、東京・神田にある全国うまいもの交流サロン「なみい」で実施した。当日の調理や配膳に専らまで、運営はすべてボランティア。会費で熊本から食材を購入することによって生産農家を応援するということにし、定員40人で呼びかけたところが、参加希望者が相次ぎ、途中で

## がまだせ、くまもとと！

熊本でももの大地震が発生してから早や4か月がたとうとしていた4月14日の震度7の前震のあとに再度、震度7の本震とされる激震が襲い、前震では比較的軽微であった被害が一挙に拡大し、多くの方が犠牲となられる大惨事となった。筆者は1991年6月から93年10月までの年7か月、仕事の関係で熊本市に在住したが、この間にお世話になった多くの方々が被災され、自宅が全壊、半壊された方もあった。早々の再建なかり修理もままならず、不便に耐える毎日の生活を余儀なくされるとともに、経済的な負担も大変なことを推察される。あらためて心からお見舞い申し上げます。

年寄りの身を現地で応援はかえって早手まといになりかねないということぞ、どのような応援・支援ができるのかと逡巡していた。そうしたところが、銀座農業政策塾に集う仲間たちが中心になって、熊本の旬の食材や飲み物を取り寄せその手作りの食事会をやるということになり、7月9日(土)の13時

足取りをせざるを得なくなつて、結島教名が参加。熊本から上京したフードコーディネーターの吉岡亮子さんに震災被害とその後の状況等について報告をいただいたうえで、熊本の食材をたっぷり使った料理と酒・焼酎を堪能して盛り上がったが、くまもと食べる通信の協力もあってこうした応援の心がいきなりとも熊本に送り届けることができただけではないかと思

この応援の会は、熊本を励ますと同時に、異業種交流の貴重な場ともなり、それぞれに名刺交換するとともに、話も大にはずんだ。筆者もたくさんの方々と面識を得ることができたが、参加者の一人、入江香さんからその自著『悲しみを生かす力』をいただいた。2000年12月に一家4人が殺害される「世田谷事件」が発生したが、殺害されたのは入江さんの妹さん一家といつと、入江さんは絶望のどん底に突き落とされるとともに、周囲の偏見や心無い報道、愛する家族を助けられなかった自責の思いにとらわれ続け、そうした深い悲しみに向き合う中で紡ぎ出されてきたメッセジを綴ったものだ。私

の話に耳を傾けてくれる人がいる。心を一つにして聴いてくれる。そのことが私に力を与えてくれた。支援されるだけでなく、自分も誰かを支援し、誰かの力になっている。そうした関係性が、悲しんでいる人の心を輝かせ、力を引き出すこととなる。このメッセージは深く重く、即熊本へのメッセージともなる。さらに「一人は万人のために、万人は一人のために」なる協同組合精神の三原則あるべき認識でもあるように受けとめた。情けは人のためならず。熊本を応援する会がかえって私自身が励ましている。をいただいたような気がしている。

(農的社会学サイエンス研究所代表)